人はそれぞれがそれぞれの時間のなかで、さまざまな思いに揺れながら日々を過ごしています。作品を読みながら、言葉は生きることの奥深さに触れることを可能にし、痛切な思いも瞬間の喜びもぼんやりとした憂いも強い傾きもどんな心のありようも掬ってくれる器になり得るのだとつくづく感じることができました。

delete キー
押された文字は
地平線のしたへと落ちて
星くずになる　　翠（東京都）

消された文字、誰にも届くことのなかった言葉が、生まれた瞬間の光を宿したまま地球の裏側で星となってまたたいている世界は素敵です。

信号の二色のもとの僕たちの
何を見ている傾く月は　　松下　誠一（東京都）

なるほど確かにわたしたちは“進め”か“止まれ”かのどちらかの選択のなかで生きていますね。きっと「傾く月」は、もうひとつの世界へ旅立った魂の住処なのでしょう。そこは２つの選択から解き放たれた場所に違いない。

サイコロの一面にだけ降る驟雨　　まちりこ（埼玉県）

一つの運命を静かに見つめているような感触が伝わってきます。「サイコロ」からすごろくが思い浮かび、人生のなかで雨ばかりがひたすらに降りつづくマス目に遭遇する時期が誰にでもあるのではないか。また、多面的なわたしたちのある「一面」には常に雨が降っているのかもしれない。など想像がふくらみました。

だれの匂いも受け入れない
生きるなら
わたしはひっそり春の釣り堀　　白野（新潟県）

「だれの匂いも受け入れない」としながらも、「春の釣り堀」のなかの水はきっとしずめた思いと新たな生命を内包している。訪れた誰かによって心の奥が釣り上げられることがあるかもしれない。

命がないから
あんなに
からみあう ケーブル　　翠（東京都）

「からみあうケーブル」を見て、「命がないから」という思いにいたることに驚きました。自分に命があることの実感が意外なところから生まれることにも。

シャンプーで
落ちきれなかったものたちが
つもりつもってあたしたちです　　ベロニカ（神奈川県）

「シャンプー」という具体物が効いています。「あたしたち」は思ったよりも軽いものでできているようでもあり、なかなか手強いものでできているようでもあり。

管理者おらず
数年ほったらかしで
中身もすっからかんの
自動販売機を
写生する　　風船（東京都）

役に立たなくなってしまったものに対するまなざし。「写生する」ことで、うち捨てられた自動販売機を弔い、存在を刻もうとする心の動きが感じられました。また、そうすることは自分自身の存在を印すことでもある。こうして言葉にすることも。

もう絶交かかとで引いた線一本　　まちりこ（埼玉県）

「絶交」と線を引くのは、子ども時代のよくある無邪気なケンカ。でも、大人の世界ではその「線一本」によって戦争が引き起こされる。

卒業とともに校舎は閉ざされて
それでも光る廊下があった　　豊冨　瑞歩（茨城県）

卒業したとたんこれまで日常の場所であった校舎が自分には開かれていない場所となる。もう自分は部外者なのだという感慨。早くも懐かしい場所となってしまった廊下が眩しく光っている。

その人は
確かに何処かにいる
大抵は
一生会えないけれど　　降旗　沃（東京都）

「その人」とはいわゆる「運命の人」なのだろうか。運命とは残酷なものだけれど、例え一生会えなくても、確かに「その人」が存在していると考えることは、前へ進んでゆくささやかな力になる気がします。

君だけが居ない世界より
僕だけの世界の方が
断然マシ　　黒川凜也（大阪府）

「君」以外の一切の他者を拒否するほどの「君」への思いの強さに衝撃を覚えました。

雨だれが
予告もなしに
蚊に落ちる　　桜咲（千葉県）

雨の一粒にも死に至る蚊。それも予測不能の。死の無慈悲さ。それは人間においても変わらない。コロナ禍の今に重なります。

拝啓と書いて頭をあげるとき
あなたのように動かない月　　豊冨　瑞歩（茨城県）

「あなた」に書いている手紙でしょうか。「あなたのように動かない月」に、「あなた」との距離の遠さと同時に自分の心のなかで満ちたり欠けたりしながらも「あなた」が確固たる居場所を占め存在していることが伝わってきます。

神さまがコーラを開けた時の風　　細村　星一郎（東京都）

大きな存在である「神さま」と卑近な「コーラ」の組み合わせが意表をついていてユーモラス。たちまち紙上に現れる清涼な風の心地よさ。

五月闇取り次ぐだけの電話切る　　花澤　希海（千葉県）

電話を切った後の静けさとともに語り手も吸い込まれてしまいそうな「五月闇」。「取り次ぐだけの電話」のつくりだす影が、いっそう闇を深めていきます。

鈍色の大団円の
外側を歩くための靴を履いて
水溜まりの底を探す　　ヒロミヤカザル（京都府）

「大団円」からからはずれたところで、自分の足で自分の靴で「水溜まりの底」にあるものを探したい。執念と言ってもよいほどの思い、自分の生き方への矜持が感じられます。

お土産のことで電話をした最期
そのままあなたへ向かう郵船　　豊冨　瑞歩（茨城県）

死の唐突さに改めて胸を衝かれます。「そのまま」の語に死に対して無力な人間の姿が映しだされているかのようです。

隣人が夜勤へ向かう
単色の麺をゆがいて
まだ生きている　　豊冨　瑞歩（茨城県）

「隣人が夜勤へ向かう」ことがわかるくらいの距離感に、こぢんまりとしたアパートの一室が映像として浮かび、「単色の麺」に淡々とした毎日が暗示されているように思いました。食べるための準備をすることは、これからも生きるということ。「まだ」は、生きることにともなう憂いが刻まれているようにも、命があることに感謝しているようにも読めます。

君を他人だと思った日から
空が割れないよう祈ってる　　ヒロミヤカザル(京都府)

自分の命だってままならない。ましてや「他人」の命なんてどうすることもできない。できることはその人の無事を祈ることだけ。

大洋の真上で染まりゆくバナナ　　まちりこ（埼玉県）

青いまま出荷され運ばれるあいだに熟してゆくバナナ。事実だけが書かれてあるわけですが、こうしてひとつの作品として提示されることで詩が立ちあがり、しんしんと心に触れ

てくるものがあります。

新品の笑い方で特許とろうか　　永井　瀬月　（神奈川県）

「新品の笑い方」だけでも生き抜く強さが感じられるところに、さらに「特許とろう」とするしたたかな逞しさが魅力。

ロウソクを
吹き消せば
時間の周りに
湖ができる　　武中　義人（岡山県）

燃やせば減ってゆくロウソクが「時間」。時間は確かに減っていくが、「湖」は深くなってゆく。炎が消えた後も湖はなみなみとそこにある。

他にも心に響く詩がたくさんありました。
6 月の作品も楽しみにしています。